

長野県菅平におけるオキナグサの調査報告

目沢 民雄・遠藤 信元（小県郡真田町菅平）

Tamio Mezawa and Nobuyoshi Endo: Report on *Pulsatilla cernua* Spreng. in Sugadaira, Nagano Prefecture

1983年5月13日の信濃毎日新聞に「開発の波に洗われて、ほとんど姿を消したオキナグサの小群落が軽井沢町追分にあったが、このほど根ごとごっそり抜かれてしまった」という記事が報道された。このことが、オキナグサの異変に気づいた最初であった。菅平にオキナグサがあることを世に知らせるのは危険かもしれないと思ったが、開発からは守らなければならないとも考えた。

1989年に日本自然保護協会と世界自然保護基金日本委員会から「我が国における保護上重要な植物種の現状」が発行された。オキナグサは「危険」とランクされ、長野県真田町は「絶滅」と記されていた。真田町のあちこちで、オキナグサが絶滅した。だが、菅平にはそれがある。ますます大切にしなければならないと思った。しかし、どうすればよいか全く見当がつかなかった。

1991年、「菅平の自然」研究会を発足させた。菅平の自然保護を第一目標として掲げていた。以後、その目的に沿った活動を続けてきたが、オキナグサの保護については、どうすべきか判断できなかった。毎年、掘られたり、抜かれたり被害はあったが、年を追うごとに、そうした行為はへってきたと感じている。スキー場関係者に協力を要請して、開発の被害は最小限にとどめることができている。

1997年度、「菅平の自然」研究会では、菅平におけるオキナグサの分布を調べようと決め、一部調査したので、その結果を以下に報告する。

調査地の概要

調査を行った地域は、長野県菅平（北緯36度31分、東経138度21分、標高1300m－1400m）で、年平均気温6.9℃、雨量1,100mmという環境のところである。調査地は菅平内のスキー場の一つで、表ダボスグレンデを中心とする、東向きの斜面の一部である。

調査・研究した内容は：

1. オキナグサの分布域、分布密度の調査、
2. 人工育成の研究であった。

それにもとずいて、盗掘の防止策、スキー場関係者、牧場関係者、行政への提言をおこなった。

1997年には：

1. 菅平にオキナグサはどのくらい生育しているか。
 2. その生育地にはどのような特徴があるか。
- について調査した。

調査方法と結果

オキナグサの生育している場所に150m×50mの調査枠を設け、そのなかを168区画に分けて、そのすべての区画の中のオキナグサ個体の数を数えた。調査に当たっては、方法を統一するためと、調査法に習熟するために、その近くの場所で、予備調査を行った。予備調査の面積は、40m×40mと4m×100mであった。

予備調査の内40m×40mと4m×100mの面積には合計781個体のオキナグサが生育していた。

150m×50m四方の調査地内には2,345個体のオキナグサが生育していた。密度は、1区画40m²に20個体以上生育していた区画が168区画中49区画あった。

一番高い密度の区画は、1区画当たり、70個体であった。すなわち、0.6m²あたり1個体であった。

考 察

表ダボスの面積はおよそ25ヘクタールあるので、その約2割にオキナグサが同じような密度で生育しているとすると、ここには1万個体をこえるオキナグサがあることになる。さらに、他の場所でも同じように生育している場所があるので、菅平全体としては1万5千個体以上生育しているだろう。上の二カ所以外にも、シバ草原となっている場所があるが、観察の結果、オキナグサの個体は少ないか、ほとんどみられない。環境は似たような場所であるが、オキナグサが見られない理由はいまのところわからない。

表ダボスはスキー場となっているので、毎年10月に草刈りをする。その結果、シバ草原が維持され、オキナグサの生育に都合のよい環境をつくっている。オキナグサが生育している場所に共通する特徴は：

1.シバが優占し、そのほかに、ニガナ、アズマギク、アマドコロ、スズラン、オオバギボウシ、キキョウ、カセンソウ、スズサイコ、カワラマツバなどが生育している。

オキナグサが少ないところは、ススキが密生していて、ノコンギク、オカトラノオ、カワラマツソウ、ヤマオダマキ、ハクサンフウロ

ウがはえていた。オキナグサのある場所、ない場所どちらにも生育していた植物は、アキノキリンソウ、ワレモコウ、アヤメ、ヤマハギ、ユウスゲであった。

そのほかの条件としては、土が堅くなり、斜面の傾斜がきつくなるか、谷の底の平らなところにもオキナグサは見られなくなった。現在、オキナグサが生育している場所でも、草刈りなどを止めるとアカマツの幼樹が生育するようになり、やがてマツ林に移行すれば、シバ草原は消滅してオキナグサの生育地は失われてしまうおそれがある。

今後の課題

表ダボスの自然環境は、オキナグサの生育に適していて、スキー場の管理もこの植物の生育を阻害しないので、盗掘などがなければこのまま生育しつづけるであろう。

しかし、リンドウ、センブリ、ウメバチソウ、マツムシソウなどの草本を維持するには、草刈りの時期をこれらの草の種子が実った後に行うようにすることが必要であろう。同時に、この場所の群落がアカマツの林にならないような管理をすることもオキナグサ保全には必要な対策であろう。

また、現在同じような環境にありながら、オキナグサが生育していないのはなぜかということに関する調査も継続して行く予定である。

さらに、オキナグサの種子からの繁殖も成功しているので、これを継続していくが、それを、現在生育していない場所に移植するのがよいかどうか検討を加える必要がある。